



毎月十五日発行 所大社 社会
像 像
〒811-3505 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-12-1311(内
定価 一年送料共 1000円

神具・装束 株式会社
結城式場用品 会社
福岡店 福岡市博多区東公園一丁目二番八号
電話 福岡(092)651-1945
本店 京都市下京区小石川六条北入一丁目600番
電話 京都(075)343-1334
電話 京都(075)343-1334

秋季大祭に先だち 沖津宮御神璽迎齋行

御座船に福吉丸(大島)

世界各地で異状気象が続く、日本列島にも大雨等の被害をもたらした夏も終り秋の陽射しを感じるこの頃当社においては来る秋祭りをお祝いし、準備に入りました。
八月二十五日「海洋神事奉賛会」打合せ会議が開催され、この会議で決定された沖津宮御神璽を迎えに御座船福吉丸により九月十一日、神職、沖・中西宮奉賛会役員等により齋行された。午前八時、鏡の様な朝風の中、御座船「福吉丸」は沖ノ島に向けて大島港を出港した。大田宮司以下神職・奉賛会役員等総員二十五名が御座船に乗り込んだ。午前



沖津宮御神璽迎齋行の御座船「福吉丸」が大島港を出港した。乗組員と奉賛会役員が船に乗り込んでいる。

十時半出御齋行を奉仕し沖ノ島を正午に出港した一行は大島港に入港し、午後二時沖津宮入御齋行を奉仕した。宗像大社秋季大祭は古くより「田島放生会」と呼ばれ、今から約七百余年昔の鎌倉時代(貞永元年)に大宮司宗像氏により始められたと伝えられている。神郡宗像の郡民奉仕の祭りで、国家の安泰と五穀豊穡、海上安全、大漁満足を感謝する盛大な祭りである。全国宗像神六十余社の総本宮の最も伝統ある祭りとして今日まで連綿と受け継がれている。この大祭のハイライトは「みあれ祭」と呼

ばれる海上神幸である、神郡六浦の漁船を始め芦屋、波津、新宮、相島等の近隣浦々の漁船をも含めた四五百隻の船団が、沖津宮・沖津宮の御神璽を奉安する「御座船」を中心に、宗像大社の鎮まります玄界灘洋宮まで神幸する神事が

「沖津宮御神璽迎え」と呼ばれる祭儀である。この御神璽奉安の御座船は「海洋神事奉賛会打合せ会議」で定められた福吉丸(大島)が奉仕した。「御座船」は大祭に先立ち「みあれ祭お座船」の船飾りと同様に、船首に「国家鎮護」の大幡を立て、「おん長手」と呼ばれる赤白の吹き流しを立て、船首に「波切り御幣」を飾り、さらに国旗、大漁旗を飾り立てるものである。沖ノ島よりお迎えした

「沖津宮御神璽」は、中津宮本殿内陣に十月一日の大祭まで仮鎮座される。大祭当日、中津宮を御出御された御神璽は、それぞれ沖津宮、中津宮お座船に奉安され、海上を神幸の後、神湊波止場にてお迎えされる。沖津宮御神璽と一緒に三宮お座船の上、頓宮(お旅おま)まで神幸され、そののち神幸にて、総社(辺津宮)に入御され「秋季大祭第一日祭」が齋行される。一年に一度、三宮の御神璽を辺津宮に奉安し、新しい大神の御神徳を戴くお祭りで、ここに「御生」の祭りと呼ぶ源がある。この「みあれ祭」準備が始まる頃には、神郡の野山の緑もその色合いを一段と深め、秋近しを感じさせる。

海洋神事打合せ会 九月中旬沖津宮御神璽迎え

平成十年度海洋神事奉賛会「みあれ祭」打合せが八月二十五日、当社斎館に於て開催された。矢野虎太(福岡)前海洋神事奉賛会長の後任村田繁美会長(地ノ湯)以下各漁業組合長、参事、水難救済所所長を始め太田宮司以下関係職員出席のもと午前十一時より開会した。この会議は、秋季大祭「みあれ祭」海洋神事の本管となる会議で、沖津宮御神璽迎えの日程、御座船の審議から大祭(十月一日)当日の海上神幸船団編成、檣台(御神璽)奉仕者に至る人員まで話し合われる重要な会議である。会議は大田宮司の「献上若布」奉仕に対し奉賛会にお礼申し上げ、今年の「みあれ祭」にさらなる協力を願う挨拶が始まり、村田会長、沖・中西宮奉賛会長佐

秋季大祭日程

- 九月三十日(水) 辺津宮地主祭、辺津宮宮祭
- 十月一日(木) 沖津宮出御祭、辺津宮出御祭、大島港御免籠(みあれ祭)神湊港着(玄海魚市場)陸上神幸、頓宮祭(神湊)、頓宮御免籠、頓宮車神幸、御座車神幸、辺津宮入御祭(主基地方風舞奉納)
- 二日(金) 午前八時 流籠馬神事、午前十一時 秋季大祭二日祭(郡内神職奉納・氏子奉納)、午後二時 翁舞奉納、午後三時 末社祭
- 三日(土) 午前十一時 秋季大祭三日祭(浦安舞奉納)、午後二時 第一・第三宮祭、宗像護国神社秋季大祭、献茶祭(南坊流し・滝口社中)



宗像大社歌会詠草

「サチコ」のいきいき人生を聞いた。サチコは、大正五年生まれのチャキチャキの江戸っ子姉さんで、元新橋の芸妾である。今は、多方面で老人達の面倒を見たり、ボランティア活動、執筆活動に大活躍の老姉さんで放送中に、視聴者より児童やファックスの紹介があった。その一文、あるトラック運転手の感想でいきいき人生を大愛おしく聞いていた。本物の江戸っ子とは、チャキチャキの江戸っ子とは、姉さんの様な人物を云々のだく初知っていた。大愛おしく大切にしていた日本人を見る様だか...と書いて送っている。サチコさんは新橋の芸妾として育ち、今年八十二才の高齢を迎えた。しかしその人生はすごい。まず芸妾として勉強中の時代に、独学で英語を学び、私塾へ通い三年間無欠勤で勉強した。入塾の時、紹介者との約束が「何事がある」とも三年間欠席しない、「途中でやめない」事であった。午前六時より歩いて学校へ行き午後六時頃かから芸妓として働き午前一時頃、家に帰る。この定期的通学を三年間通し、のち英語の話せる芸妾として新橋を始め東京中に名をはせる。お座敷で外国有名人と知り合う。さらにアメリカに渡り見聞を広げ、今ではドイツ語で話せる「いきいき人生」を出版している人である。老人ホームで話す時、最初「この若造が」と云う態度で聞いている人達も、最後に姉さんの姿を聞いて、目を輝かすそうである。日本人のすごさを知った。

名古屋 小田 留子
ハートまで透けて見えうなブラウスの若きと真向ふ朝の地下鉄
評) 年配者からすれば若者のファッションは年々尖鋭化するかに見える。ハートまで透けて見えうな」の口調に驚きと少々批判が伺えて面白い。
福岡 中村 勇
みかん箱つに余る土産物車に積み重ねるに土産物が別れるものも入れて瑞穂しい夏野菜を積み込んで、作者の栽培したものを、そんな光景が想像されるほほえましい一首である。
ひかりヶ丘 篠原みさを
職業軍人の君が賜ひし一枚の葉書を夏の落葉にくべる(評) 君は主人だろうか恋人だろうか、いづれにしても終戦後五十二年を経つた今、君からの葉書を燃やすすべかな決別である。夏の落葉というのも、ひそかな決別にふさわしい。
結句「くべ」直したのが原作の「くぐす」は、どんな意味だろうか、乞御教示を。
自由ヶ丘 細川 翔子
池の辺に水を飲むる鴉をり黒々と口ばし太し(評) 「る」を「を」が気になる。「下り来て水を飲む」とすると良いのだが、それは直し過ぎ。しかし三句で、ひと呼吸置き「黒々と口ばし太し」と嘴のみに視点をあてた詠み方は、水辺の大鴉の姿を活写して成功している。
名古屋 小田 喜一
一年をこの世に生きて逝きし子の茄子の馬なり小さく作る
日の里 石松 知子
草はらのもじりの花見せたくて吾も幼の背丈に屈むたり
朝野 藤井 浩子
幼児の二人が遊ぶ軒下し家紋の盆の提灯の下
日の里 石松 弘次
連日の猛暑に耐えかね図書室に新聞を眺め涼を楽しむ
田野 森 甲子
出穂せし稲田の上の風にり精霊饅頭群れて飛びをり
胡瓜 鐘崎 安永 久子
茄子胡瓜一本つを夫と食ふ山椒香る床漬うましと
曲 天野 玲子
孫という小動物よ突如きたり家中荒らして帰るゆききたり
武丸 中村さつき
大暑すき梅雨の戻りのごとき雨芝生の庭に雑草萌ゆる
原町 八波 五月
捨子花と呼ばれてあるる曼珠沙華美しけれど悲しき花か
町上津役 有吉 陽子
高速道彼方に見ゆる千枚田水ひからせて手植あはまじまる
田久 井上 光
イヤホンに何聞かあるや少年はたばこ片手に顔俯せて過ぐ
庄内 原田 衛
真夏日と思ふ光に隠陽木々の青葉はいよいよ色濃し
吉留 高山 信子
今朝見ればうす紫のささげ咲く昨日までにはなかりし花の
徳重 石松ヤス子
雨風の災もなく「ゆめつくし」は豊かに稔る山田の里に
光岡 森田富佐子
朝早く洗濯せば乾きたり陽の香のするをたたみ終えたり
光岡 古森テル子
灰色の雲と雲との隙間より差せる光に家群明るし
池田 小田 イセ
歌一つまどめかねたる夜の作し眠れぬまに時はすぎゆく
光岡 四之宮多恵子
水色の空の高きにむくむくと積乱雲立ち庭に蟬鳴く
大島 越智 治子
明石より淡路にかかる大橋は夏日に照りて海に輝く
大島 越智 治子
いなげがたき夜に閉こゆる青葉木葉を聞きてみし速き日思ふ
在 自 佐々木和彦
ほととぎす鳴く季すでに過ぎゆくちかくの鶏の朝早く鳴く
福岡 池浦千鶴子
あしたより旅するわれら蟬郷と天道に葉園まかす
山寺の静な朝のひとときを夏鶯の清し声聞く
土穴 瀧口 敦子
沖津く沈む夕日を浴びながら大型タンカーゆつくり進む
田野 森 つるの
宗像大社夏越祭に掛けらるる大牙の輪を初めて滑る
光岡 河村 久光
曇き日にエアークンが部屋にさやがりつ緑の平野に秋のちかる



中津宮七夕祭が、八月七日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

北南相対に「南の川」を望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

大島中津宮 七夕祭斎行

中津宮七夕祭が、八月七日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

連休明けの五日から十日まで、フランスのアルザスで開催された環境問題シンポジウムに招かれて参加した。クリゲンタール川に題された会議は、会場となった小さな城の名に由来する。それは、EUの本会議場のあるストラスブールから、車で約一時間かかる東に行ったワージュ山脈の山麓に位置する小さな村にある。

主催者は、バックス・クリスティといふカトリックの団体で、これにゲート基金及びFPH基金の後援があつて開催された。会議のコーディネーターは、ヨーロッパ評議委員会(EU)の創造物の保護と管理委員長のジャン・ピエール・リボ博士といふ。

クリゲンタール川といふやうに、この会議はすでに三回目。第一回は平成八年三月に開催され、大変有意義なものであったので、引き続き昨年十一月「水」をテーマに開かれた。今回は「土」がテーマである。送られて来た案内状には、人間の手に上り地球が描かれ、地球の上にソイル(土壌)といふ文字が見える。土の漢字も印刷されている。副題に文化と精神性である。

参加者は約四十名、ほぼ五大大陸から集つて来ている。二十数名が登壇し、議論が進んで行く。土壌学・農学・歴史学・環境学・宗教者等の立場からそれぞれ発表があった。地元市長の話もあり、話題は実に多彩で考へさせられることが多い。

会議は、六日の夕刻から始まった。参加者が世界各地から持参した土を混合するセレモニーと前回の会議の報告があった。翌朝から実質的会議となり、午前九時より昼食をはり夕食九時までといふスケジュールである。最初、主催者が代表としてコストコが、本会議では化学的アプローチ、世界の主要な宗教における土壌の役割、土壌の利用、西洋植生とソイルの相違等に視点を置いたおこなひたい旨の説明。

科学者の発表は大変興味を引くものがあったが、ここでは宗教者の発表を中心に紹介してみたい。登壇者であった、カトリックのユダヤ教、バハイ教、神道、儒教、カタク・インディアン、イスラム教、アニミズム(ペニ族の宗教、マレーシアの文化と

一般的に「神教以外の伝統宗教は、どれも小生の発表も、日本神話における土の神から説き起こし、産土信仰、伝統農業における土へと及ぼし、日本人と土がいかに親密であるか説明した。しかし、明治維新以降、特に戦後の西洋化・工業化の中で、日本人が伝統的に持っていた土に対する感性は薄れていくと指摘して、現在ではさうしたものが見直される傾向にあるとも報告した。

一般的に「神教以外の伝統宗教は、どれも小生の発表も、日本神話における土の神から説き起こし、産土信仰、伝統農業における土へと及ぼし、日本人と土がいかに親密であるか説明した。しかし、明治維新以降、特に戦後の西洋化・工業化の中で、日本人が伝統的に持っていた土に対する感性は薄れていくと指摘して、現在ではさうしたものが見直される傾向にあるとも報告した。

一般的に「神教以外の伝統宗教は、どれも小生の発表も、日本神話における土の神から説き起こし、産土信仰、伝統農業における土へと及ぼし、日本人と土がいかに親密であるか説明した。しかし、明治維新以降、特に戦後の西洋化・工業化の中で、日本人が伝統的に持っていた土に対する感性は薄れていくと指摘して、現在ではさうしたものが見直される傾向にあるとも報告した。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

望む高台に鎮座されるこの日(金)午後八時より、中津宮境内を流れる清流「南の川」の北側の牽牛社、南側の織女社神前で盛大に斎行された。

宗像護国神社 千灯明

終戦記念日の八月十五日、宗像護国神社の戦没者慰霊祭並びに田島区千灯明が、田島区長以下育成会々長、役員、田島区遺族会々長、婦人部長を始め地元田島区民児童等は宗像郡、田島区連合会代表等約二百名参加列の中、厳粛に斎行された。

境内の清掃奉仕が行われ、祭典の準備が整えられた。定刻の午後七時、夕陽迫る境内では、父兄児童の手により一斉に「百基の灯明が灯され、神社高向権佐宜を斎主に神職四名奉仕の下祭典を斎行。

神前には、海の幸、山の幸に加え英霊の御魂を慰めんと特別に煙草、缶詰等も供えられた。お祝いの後、斎主が御国の為に尊い生命を捧げられた郷土宗像の二五七三柱の英霊に対し、感謝の意を表すと共に、世界の平和、御遺族の平穏無事を祈念する祝詞が奏上された。

続いて玉串拝礼があり、田島区々長元岡善男氏、同育成会々長中村良治氏、田島区遺族会々長、婦人部長等には宗像郡遺族連合会々長中村弘氏、宗像市遺族連合会副会長長直田氏以下遺族会々員、又玄海町長和延広氏、そして田島区の児童等が英霊に対し篤き祈りを捧げた。

祭典終了後、境内に於て地元田島地区育成会児童等による子供花火大会と田島区民により益壽火大会が開催された。また、地元消防団の方々の奉仕により児童

祭典終了後、境内に於て地元田島地区育成会児童等による子供花火大会と田島区民により益壽火大会が開催された。また、地元消防団の方々の奉仕により児童

祭典終了後、境内に於て地元田島地区育成会児童等による子供花火大会と田島区民により益壽火大会が開催された。また、地元消防団の方々の奉仕により児童

一話 (71) 古代の海上航路 (6) 楽 杏 子

この時期のアルザスは、一年で最も良い季節であらう。牧場は一面の青草で覆はれ、ロニエの花が香り、水辺には名も知らぬ草花が咲き乱れてゐる。最終日には、クリゲンタール城の中庭にアロカリアといふ針葉樹を、持ち寄つた世界中の土をかけて、参加者一同で折りの言葉を書きながら植樹した。それぞれ伝統的衣装を身に付けて、きれいな芝生の庭で、近年に山から流れ出る清流がある。きつと、近くには大きく成長することだらう。

今回の会議に参加して種々思ふところがあった。また、十分に整理できないが、収穫は大きかった。同時に環境保全への道も険しいことを如実に知ることができた。自然と共生して来た神道の立場から何に貢献できるのか、再考を促す旅でもあった。また、世界宗教以外の伝統宗教の中に多くの共通点を見出すこともできた。私たちの知識はあまりにも西洋に片寄り過ぎている。ほとんど他のことを知らない。さうしたことに気付かせてくれた主催者に心から感謝したい。

課題となすべきことは多くあり、着実に私たちの歩みをすすべと深く思った。(神社新報)

八月十五日は、終戦記念日であると共にお盆の終わる日でもある。灯明のともしびを受けて英霊の御心も安ぜられ、田島の地で物故された御先祖の方々の御霊に対しても送り火となり慰められた事と思う。

この送り火が消えると、神都宗像にも秋風が吹く頃となる。

この送り火が消えると、神都宗像にも秋風が吹く頃となる。

宗像護国神社の戦没者慰霊祭並びに田島区千灯明が、田島区長以下育成会々長、役員、田島区遺族会々長、婦人部長を始め地元田島区民児童等は宗像郡、田島区連合会代表等約二百名参加列の中、厳粛に斎行された。

境内の清掃奉仕が行われ、祭典の準備が整えられた。定刻の午後七時、夕陽迫る境内では、父兄児童の手により一斉に「百基の灯明が灯され、神社高向権佐宜を斎主に神職四名奉仕の下祭典を斎行。

神前には、海の幸、山の幸に加え英霊の御魂を慰めんと特別に煙草、缶詰等も供えられた。お祝いの後、斎主が御国の為に尊い生命を捧げられた郷土宗像の二五七三柱の英霊に対し、感謝の意を表すと共に、世界の平和、御遺族の平穏無事を祈念する祝詞が奏上された。

続いて玉串拝礼があり、田島区々長元岡善男氏、同育成会々長中村良治氏、田島区遺族会々長、婦人部長等には宗像郡遺族連合会々長中村弘氏、宗像市遺族連合会副会長長直田氏以下遺族会々員、又玄海町長和延広氏、そして田島区の児童等が英霊に対し篤き祈りを捧げた。

祭典終了後、境内に於て地元田島地区育成会児童等による子供花火大会と田島区民により益壽火大会が開催された。また、地元消防団の方々の奉仕により児童

祭典終了後、境内に於て地元田島地区育成会児童等による子供花火大会と田島区民により益壽火大会が開催された。また、地元消防団の方々の奉仕により児童

祭典終了後、境内に於て地元田島地区育成会児童等による子供花火大会と田島区民により益壽火大会が開催された。また、地元消防団の方々の奉仕により児童

宗像護国神社の戦没者慰霊祭並びに田島区千灯明が、田島区長以下育成会々長、役員、田島区遺族会々長、婦人部長を始め地元田島区民児童等は宗像郡、田島区連合会代表等約二百名参加列の中、厳粛に斎行された。

境内の清掃奉仕が行われ、祭典の準備が整えられた。定刻の午後七時、夕陽迫る境内では、父兄児童の手により一斉に「百基の灯明が灯され、神社高向権佐宜を斎主に神職四名奉仕の下祭典を斎行。

神前には、海の幸、山の幸に加え英霊の御魂を慰めんと特別に煙草、缶詰等も供えられた。お祝いの後、斎主が御国の為に尊い生命を捧げられた郷土宗像の二五七三柱の英霊に対し、感謝の意を表すと共に、世界の平和、御遺族の平穏無事を祈念する祝詞が奏上された。

続いて玉串拝礼があり、田島区々長元岡善男氏、同育成会々長中村良治氏、田島区遺族会々長、婦人部長等には宗像郡遺族連合会々長中村弘氏、宗像市遺族連合会副会長長直田氏以下遺族会々員、又玄海町長和延広氏、そして田島区の児童等が英霊に対し篤き祈りを捧げた。

祭典終了後、境内に於て地元田島地区育成会児童等による子供花火大会と田島区民により益壽火大会が開催された。また、地元消防団の方々の奉仕により児童

祭典終了後、境内に於て地元田島地区育成会児童等による子供花火大会と田島区民により益壽火大会が開催された。また、地元消防団の方々の奉仕により児童

祭典終了後、境内に於て地元田島地区育成会児童等による子供花火大会と田島区民により益壽火大会が開催された。また、地元消防団の方々の奉仕により児童

第二十八回 西日本菊花大会開催要項

西日本一の菊の祭典・十月三十日より開催

西日本を代表する菊花の祭典である、西日本菊花大会は、今年も十月三十日より十一月二十日まで、宗像大社境内特設会場に於て開催される。

今年で二十八回目を迎える本大会では、福岡県を始め、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、山口各県より、代表的な菊花愛好家が丹精込めて作成した菊花が、一堂に会し技を競うもので、菊つくり九州一を決定する大会として、西日本を代表する菊の祭典として各地の注目を集めている。

本大会を主催する宗像大社菊花会では、一月に桜雲四月に理事会、七月運営理事会、九月に理事会等の会合や打合せを行った。去る九月十三日(日曜日)には、当大社敷内に於て菊花会役員五十名来賓として、全菊連会長川田様一氏出席のもと理事会を開催、本大会の開催要項、出展の最終調整等が行われ次のように決定した。

協賛会社並宗像青年会議所会員奉仕
搬出 十一月二十三日
開催場所 宗像大社境内
参加区域 福岡・佐賀・長

主権者 宗像大社菊花会
会長 高田太助
後援 福岡県・Jリーグ九州

崎・熊本・鹿児島・大分・宮崎・山口
福岡県観光連盟・福岡県農業協同組合中央会・福岡県教育委員会・全日本菊花連盟・近郷

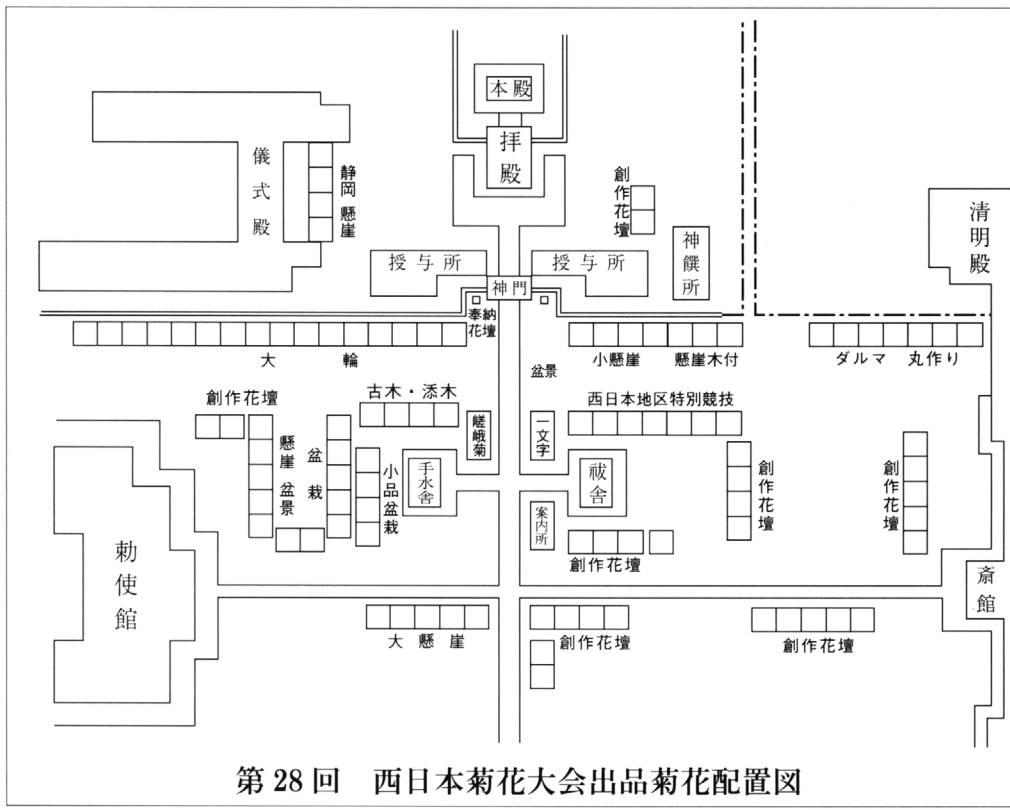
市町村外十団体の審査規定
①予選審査
予選審査は各地各会を本会理事者がまわり、審査を行い、優秀なるものを本大会に出展させる。

②審査基準
大輪 盆数三〇〇盆
花谷色彩五〇〇盆
調和(二〇)点
盆数 盆数五〇〇盆
花谷色彩三〇〇盆
調和(三〇)点
懸崖 盆数三〇〇盆

③審査方法
審査員六名による採点で上位を選び審査員の合議による比較審査で最優秀賞・優等賞を決定する。

福岡県花弁園芸組合連合会
顧問 吉田 徹生
名称 第三回切花、補助盆数一鉢競技・山口大会
十一月七日、十一月十一日
宗像大社境内西日本特別競技九州大会
十月三十日、十一月一日、十一月二日
宗像大社境内西日本特別競技九州大会
十一月三日、十一月四日、十一月五日
宗像大社境内西日本特別競技九州大会
十一月六日、十一月七日、十一月八日

名称 第二十八回西日本菊花大会
期 十月三十日、十一月一日、十一月二日
審査 十月三十日、十一月十五日
表式 十一月十五日
設営 十月十八・十九日
宗像地区商工会青年部会員並菊花会員奉仕
搬入 十月二十五日
県内外二十余社の



第28回 西日本菊花大会出品菊花配置図

昭和四十六年「昭和の大御造営」が行われた。この工事の第一次工事で完成したのが交通安全祈願殿と大駐車場(約五百台収容)である。



その後約二十年間、日常時はもちろん、大祭、正月祭時の参拝者駐車場として使用している。この間何度か専門業者による修理修復を行ったが、今回のライン引き作業を大社員で行うことになった。日々多くの参拝者を迎え入れる大切な駐車場のため、参拝車輛がスムーズに駐車出来る様注意を払った。

年間と比較的参拝者の少ない八月の時期を選んだが、アスファルト上で猛暑の中に行う作業なので汗拭きながらの大仕事となった。八月十七日に始まった作業も日々白線が浮かび上がる様子を目にする職員の疲労も充実感へと変わって行

大駐車場ライン引き 大祭前に作業行う

大祭を始める西日本菊花大会、七月五日、正月祭等に参拝者を迎える諸行事の準備が当大社職員の手で、八月十七日に始まった作業も日々白線が浮かび上がる様子を目にする職員の疲労も充実感へと変わって行

花谷色彩五〇〇盆
調和(二〇)点
盆数 盆数五〇〇盆
花谷色彩三〇〇盆
調和(三〇)点
懸崖 盆数三〇〇盆

福岡県花弁園芸組合連合会
顧問 吉田 徹生
名称 第三回切花、補助盆数一鉢競技・山口大会
十一月七日、十一月十一日
宗像大社境内西日本特別競技九州大会
十月三十日、十一月一日、十一月二日
宗像大社境内西日本特別競技九州大会
十一月三日、十一月四日、十一月五日
宗像大社境内西日本特別競技九州大会
十一月六日、十一月七日、十一月八日

懸崖の部 八〇、二四鉢
盆栽の部 二五、五鉢
西日本特別競技九州大会
五三、三鉢
特作の部 八〇、十鉢
一八五、〇鉢
総計 二、三三六鉢
三、五五六鉢

古札焼納祭午後二時斎行
宗社(出向) 太田宮司
宗社権宮司他四名、於住吉神社
来社、出光興産(株)福岡支店青木氏外一名(献茶祭の件)
十六日(水)
参拝 唐津神社戸川宮司、防府天満宮高橋祿
宜外七名
七日(金)
参拝 太宰府天満宮実習生。
出光興産(株)千葉製油所
来社、NHK札幌白河ディレクター取材の件
二十一日(金)
参拝 出光興産(株)千葉製油所副所長杉山修二氏以下五名
会談 玄海町消防団第一分団打合せ午後六時
二十一日(土)
参拝 大和高校三十二年卒業生一同
参拝 参議院議員橋本聖子氏、衆議院議員渡辺眞能氏他関係者
祭典、山下職舎解体家祓
廿二日(日)
来社、玄海町社会福祉協議会(同)部長他名
二十三日(火)
会議・平成十年度「海洋神事」みあれ祭
打合せ、午前十一時於齋館
二十七日(水)
参拝・タケル会飯田会長、(財)日本フアッション協会(山岡孝治)部長、日経新聞本原徹局長
他一名
三十日(日)
参拝(名島産業建設四十名、大型トラック二十台)

宗像大社歌会 俳句作品集 四四

日の里 花田いつ枝
ありつたけを洗ふ視の乾き
けり

藤沢 井上 玄洋
眠たげに波打ち寄せる疾疾
暑

自由ヶ丘 細川 桐子
のうぜん花窓越しに見てひ
るかな

小笹 山下しづえ
眞夏日の空の青さに酔容
電柱の影に涼あり朝の蟬

福岡 森 清
若松 高橋 忠實
猷詠俳句夏敷敷勢も飛込
む暑さかな

東郷 吉武 湧泉
土用釜釜の跡の父の肌
東郷 中野 きみ
新聞に顔をつづめてつい昼
寝

東郷 吉田 杵子
もう帰る啼くかなかなに夕
迫る

東郷 吉田 杵子
物なべて光りの中や梅雨明
くる

東郷 三浦美千代
金色に輝やいて砂に小判草
岳

東郷 有吉重紀子
噴煙かそれとも雷雲阿蘇五
岳

東郷 田中 雨葉
葦草や夫の机に新刊書

東郷 木原 房子
老犬工話好きにて土用照り

(続) 淡の寄物

130

いしいただし

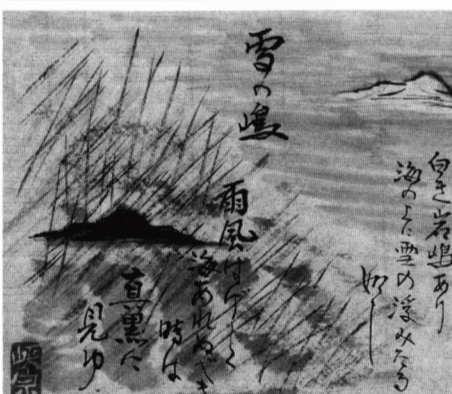
八月五日、急に思い立った。二十周年を迎え、これまで大阪・千里にある国立民族学博物館と東洋区瑞光寺にある瑞光寺に行つた。国立民族学博物館は昨年開館



瑞光寺は臨濟宗京都・大本山妙心寺に属する。縁起には聖徳太子の創建とあるが、そこまで古くはないようである。寺号の瑞光寺は、二世北禅の和尙の頃、松林山・瑞光寺と改めたという。江戸時代には堂塔伽藍が建ち、広い境内を有していたようだが、今次大戦で空襲を受け本堂等が消失。昭和五十九年三月、三十九年ぶりに本堂が再建されている。広大な境内は大部分公園となつていく。看板によつて雪鯨橋があった。鯨の肋骨が欄干となり、

青柳種信著 瀛津島防人日記(下巻二)

向さくる山にし有りし
大きみの宮家となりし
百済国は国津物さには
ま(返)つりて御馬廻の
部に仕へし新羅國はや
言さへく高麗のこしも
天皇のやつこととなりて
仕へまつりし
西南の海をかくりみれば
香岐の島いとよく見ゆ
ささきの海人がかたけ、
風本の西の方一里ばかりに
白き岩嶋あり、周廻三三町
ばかりもあるべき、嶋の上
は草木なし、海の上に雪
の浮みたる如くなる故に、
雪の嶋ともいふ、其島雨



雪の島 雨風 直雲 見ゆ

その支えに、左右三個ずつの肩甲骨がはめこまれている。橋を渡ると本堂がある。鯨橋については縁起書に次のように記されている。
〔宝暦六年(一七五六)今より二四二年前、当寺第四世、潭住知忍禪師、南紀行脚の御り、木地浦(現在の和歌山県東牟婁郡太地町)の漁村に着き、某家に投宿中、村長若衛門、同村次右衛門が訪ね、当地は漁務を以て生計をたてる漁村ですが、近時不漁のため生計も成り立たず衰微の極みです。貴僧は音に聞く名僧、何卒一村の存立のため、豊漁の祈願を御願ひ致します。』
禪師は不殺生戒を説いて、一旦は願ひを斥けたが、二人の必死の願ひを聞き入れ、寸患・尺善の法であらざるを修した。果してその効験は忽ちに現れ、鯨群は一時に浦曲に押寄せ、競つて漁民の手中に入った。
浦の漁民が早天に慈雨を得た如くに喜び、深く禪師の徳を讃仰し、黄金三十両と鯨骨十八本を携え、禪師を瑞光寺に訪ねてこれを贈り謝恩の言葉を述べた。禪師は漁民の律義を喜ぶと共に、人命を救助されたために捕獲された多数の鯨族の身の上下を憐み、贈られた鯨骨を用いて橋を造り、この「雪鯨橋」と名付け、これを「雪鯨橋」と名付けたのである。瑞光寺案内書に「瑞光寺の境内に、和歌山の両端に設けられた「Dr みんばく」に近づけると、そのもの名前や用途が画面に表される。さらにもっと詳しく知りたい時には壁際の「Dr みんばく」に持つていくと、現地語で読んで意味まで説明してくれる。解説書には「もの」に直接触れることをきっかけに、そのものの背後にある文化や、それを生み出した人びとへの理解を、少しでも深めることができる。この名称が付き、そう呼ばれてきたのである。
左手の粘板岩で形成された「唐土」で登つて行く。縄文時代や弥生時代の生活址がある。島の西南端の平坦地「御高(おたか)標高十メートル」へと着く。晴れた日にはここから真正面に宗像の地が遠望できる。奥の方は昔は沖津宮社務所があった所である。右手には木の鳥居がある。この鳥居を潜り抜け山へと入つて行く。ここから島は原生林地帯へと変わった。木の鳥居を抜けて急な階段参道を四百段程登ると、沖津宮本殿へと着く。この本殿周辺が古代祭祀がなされた場所である。
沖津宮の前には空掘「青柳種信著『瀛津島防人日記(おきつしまさき)』」

時は、国名にはあらず、彼小嶋のこと也。これらも何とかや由縁有けに聞ゆ。こはおがしおのさかしらなれと試に書つて。此嶋(沖島)の大神いたく汚穢を忌ふに依て、山中にてかりにも唯・小便することなし。もし過つてけがす時は、其地の土をすくひ、海に持出、磯に捨て、清き砂を、先の土取跡に埋みて、本の如くなら(均)しおく。是を犯してしかせざれば、忽狂乱とする。近頃にもさる人ありて、誰もよくしれるこそぞか。

さるべき設にとて、昨日より大なる竹筒作り置て、緒して腰に佩るやうに構へ置たれば、けふも、人々筒を腰に付つたのは、
筆を下るには、萬がづら・木の枝・岩角など懸りていゝわづらはし、吾も人も行なふみて甚見しくなん。爰より御社の東の峯をつたひて下る所を金崎といふ。
こは先に、鐘崎の海人等の漁に來ていは應りせし地也。故に号けたり。松は來らず。此岸の上に、松ひとつもとたり。茂山なれのみなり。(※今この松樹は無い。)

「き」にもすでに出てくる。辺りは、島の南岸一帯に広がる石英斑岩のガレ場から上つた所で、小さな尾根上の平坦地である。特に南岸は祭場が位置する四合目辺りから岸壁が急に立ち上がり、屏風状に連なる岩肌が山頂に達する。
本殿がある辺りが沖ノ島古代祭祀の場所である。ここに起つた巨岩(中には高さ十五メートルのものもある)の、その一つ一つが、神の依代とされ、神祭りが水々と続けられてきた。
沖ノ島は深く掘り込んだように、深い谷間が深い谷間に、深に近づくにつれ粗々しい高山を見上げる感じがするようになり、島そのものが、大草原が砂漠の中に建てられた案内用高塔の様な、三角

その支えに、左右三個ずつの肩甲骨がはめこまれている。橋を渡ると本堂がある。鯨橋については縁起書に次のように記されている。
〔宝暦六年(一七五六)今より二四二年前、当寺第四世、潭住知忍禪師、南紀行脚の御り、木地浦(現在の和歌山県東牟婁郡太地町)の漁村に着き、某家に投宿中、村長若衛門、同村次右衛門が訪ね、当地は漁務を以て生計をたてる漁村ですが、近時不漁のため生計も成り立たず衰微の極みです。貴僧は音に聞く名僧、何卒一村の存立のため、豊漁の祈願を御願ひ致します。』
禪師は不殺生戒を説いて、一旦は願ひを斥けたが、二人の必死の願ひを聞き入れ、寸患・尺善の法であらざるを修した。果してその効験は忽ちに現れ、鯨群は一時に浦曲に押寄せ、競つて漁民の手中に入った。
浦の漁民が早天に慈雨を得た如くに喜び、深く禪師の徳を讃仰し、黄金三十両と鯨骨十八本を携え、禪師を瑞光寺に訪ねてこれを贈り謝恩の言葉を述べた。禪師は漁民の律義を喜ぶと共に、人命を救助されたために捕獲された多数の鯨族の身の上下を憐み、贈られた鯨骨を用いて橋を造り、この「雪鯨橋」と名付け、これを「雪鯨橋」と名付けたのである。瑞光寺案内書に「瑞光寺の境内に、和歌山の両端に設けられた「Dr みんばく」に近づけると、そのもの名前や用途が画面に表される。さらにもっと詳しく知りたい時には壁際の「Dr みんばく」に持つていくと、現地語で読んで意味まで説明してくれる。解説書には「もの」に直接触れることをきっかけに、そのものの背後にある文化や、それを生み出した人びとへの理解を、少しでも深めることができる。この名称が付き、そう呼ばれてきたのである。
左手の粘板岩で形成された「唐土」で登つて行く。縄文時代や弥生時代の生活址がある。島の西南端の平坦地「御高(おたか)標高十メートル」へと着く。晴れた日にはここから真正面に宗像の地が遠望できる。奥の方は昔は沖津宮社務所があった所である。右手には木の鳥居がある。この鳥居を潜り抜け山へと入つて行く。ここから島は原生林地帯へと変わった。木の鳥居を抜けて急な階段参道を四百段程登ると、沖津宮本殿へと着く。この本殿周辺が古代祭祀がなされた場所である。
沖津宮の前には空掘「青柳種信著『瀛津島防人日記(おきつしまさき)』」

「き」にもすでに出てくる。辺りは、島の南岸一帯に広がる石英斑岩のガレ場から上つた所で、小さな尾根上の平坦地である。特に南岸は祭場が位置する四合目辺りから岸壁が急に立ち上がり、屏風状に連なる岩肌が山頂に達する。
本殿がある辺りが沖ノ島古代祭祀の場所である。ここに起つた巨岩(中には高さ十五メートルのものもある)の、その一つ一つが、神の依代とされ、神祭りが水々と続けられてきた。
沖ノ島は深く掘り込んだように、深い谷間が深い谷間に、深に近づくにつれ粗々しい高山を見上げる感じがするようになり、島そのものが、大草原が砂漠の中に建てられた案内用高塔の様な、三角

「き」にもすでに出てくる。辺りは、島の南岸一帯に広がる石英斑岩のガレ場から上つた所で、小さな尾根上の平坦地である。特に南岸は祭場が位置する四合目辺りから岸壁が急に立ち上がり、屏風状に連なる岩肌が山頂に達する。
本殿がある辺りが沖ノ島古代祭祀の場所である。ここに起つた巨岩(中には高さ十五メートルのものもある)の、その一つ一つが、神の依代とされ、神祭りが水々と続けられてきた。
沖ノ島は深く掘り込んだように、深い谷間が深い谷間に、深に近づくにつれ粗々しい高山を見上げる感じがするようになり、島そのものが、大草原が砂漠の中に建てられた案内用高塔の様な、三角

